

第2部 イギリスのヘリコプター救急

第1章 イギリスのヘリコプター救急体制

1 「揺りかごから墓場まで」

国民の医療費を、誰がどのように負担するのか。この問題は、どこの国にとっても決して小さい問題ではない。その解決策は、むろん国によって異なるけれども、たとえば個人がその都度自分の財布から支払うか、大勢の人が少しずつ出し合う医療保険ですませるか、すべてを国または公的機関が税金でまかなうか——この3種類くらいの方式に大別されるであろう。いずれを採るにせよ、他の方式も少しずつ混じり合い、重なりあっているのが実情である。

日本の場合は健康保険が基盤になっているが、そこには政府や自治体の税金も投入されるし、一部は個人が負担しなければならない。そのうえで、健康保険の限度を超えるような特殊な治療については、患者自身が全額を負担することになる。ドイツも健康保険が基本だが、所得の多い人は私的な医療保険に移行し、治療の内容にも特典がつく。逆に、アメリカは私的な医療保険が主体で、高齢者や低所得者には政府の援助がある。しかし政府の援助を受けられず医療保険にも入れない人があって、さまざまな問題を生じている。

さて、イギリスの場合は税金による負担が基本である。第2次世界大戦後、社会主義政権が成立して「揺りかごから墓場まで」という合い言葉の下、国民の医療は全て国家が面倒を見ることになった。実態はむろん国民の納める税金だが、表向きは無料で治療が受けられる国営医療制度、すなわち **National Health Service (NHS)** となり、これこそは 1948 年の当時、世界で最も理想的といわれたものである。

しかし、如何に理想的とはいえ、半世紀もたつと、いわば制度疲労が起こってくる。たとえば病院やベッドの数が充足されず、医師や看護師も不足し、待ち時間ばかり長くなって治療や手術もなかなか受けられない。患者の立場からすれば、タダというのは良いけれども、一方で不便であるばかりか、医療の質が落ちて病気の悪化を招くことにもなる。同時に財政面でも問題が出てきた。

そこで、1991 年サッチャー首相による改革が試みられた。その方法は、医療費を抑えたままで競争の原理を導入し、民間の経営手法を使って仕事の効率を上げ、民間資金によって病院などの社会資本を整備してゆこうというものであった。

そして 1997 年にはブレア首相による第2次改革が行なわれた。NHS の組織が肥大し官僚化して、職員の士気も低下していることから、これを改めようとするものである。さらにサッチャーの効率化に加えて、医療の質と公正が重視されるようになった。特に社会階層の低い人びとの健康状態が良くないというので、「健康の不平等」をなくすための計画が

発表される。しかし、それには先ず財政状態の改善が必要であるとして、2000年から医療費が引き上げられることになり、政府のNHS予算は1997年度にくらべて、2005年度までに1.7倍に増加した。しかし、その成果があがったかどうかについては評価が分かれるところである。

2 立ち後れたヘリコプター救急

英国のヘリコプター救急は、こうした医療制度を背景にして行なわれている。というよりも、ほとんど行なわれてこなかった。上述のような制度疲労と財政難のために、ヘリコプターを医療制度の中に組み入れることができず、他の欧米諸国に遅れを取り、初めて救急ヘリコプターが飛んだのは1987年、イングランド西南端のコーンウォールであった。つづいてケント、スコットランド、ウェストミッドランド、ロンドン、デボンの各地に広がったが、国、自治体またはNHSによる資金援助は皆無で、ヘリコプターの運航費はほとんど全てが地域住民の寄付金であった。

住民たちは救急ヘリコプターの運営資金を集めるために、自ら寄付をするほか、ガレージセールをしたり富くじを売ったりしている。しかし時には、身近な人がヘリコプターのために命拾いをしたりすると、驚くような高額な寄付を贈られるようなこともあるらしい。こうした資金難のために使用機材は小型の単発機が多く、搭乗するのはパラメディックであって、医師が乗ることはほとんどない。またヘリコプター救急の拠点数も少なく、最初の10年間で11カ所にとどまった。

このような状況から1990年代末、英国自動車連盟(AA)が3年間の期間を限って、合計1,400万ポンド(約30億円)の資金援助をすることになった。それによって7機の救急ヘリコプターが購入され、ヘリコプター運航費の一部が補填された。この援助は2002年まで実行され、終了した。

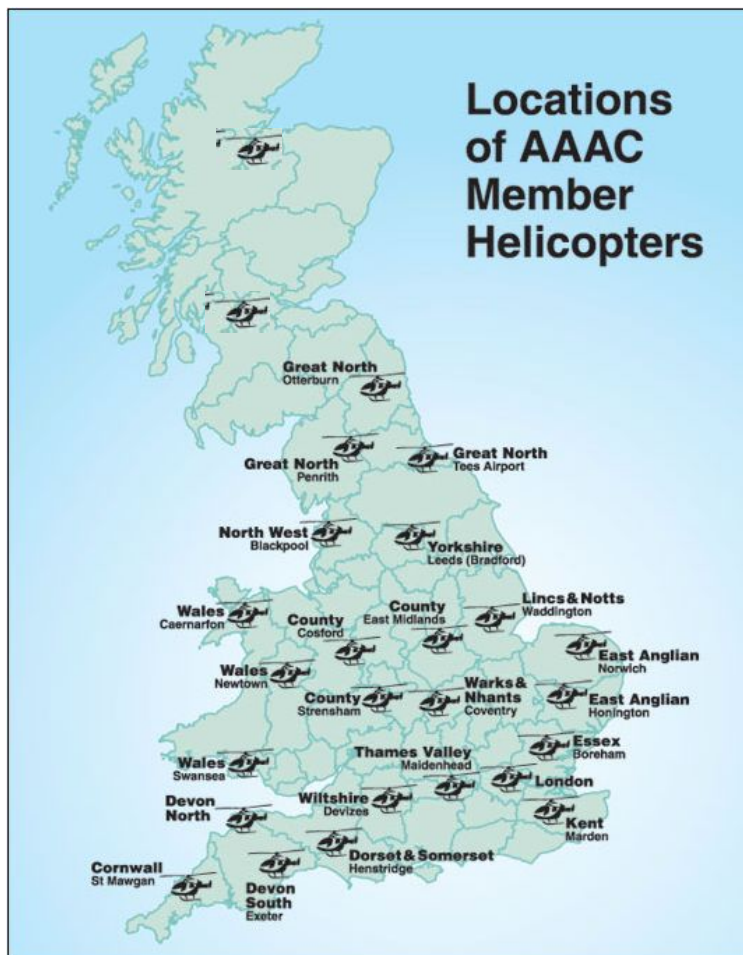
その間、スコットランドで2機の救急ヘリコプターが、政府の費用負担で飛び始めた。スコットランドのヘリコプター救急だけがなぜ国の支援を受けるのか。ブレア首相の出身地で、労働党の勢力が強いからという皮肉めいた見方をする人がいる。あるいはイングランドに対抗するスコットランド特有の独立独歩の考え方があって、スコットランド政府による費用負担かもしれない。

最近は自動車情報を扱う英BBC放送の人気番組「トップギア」の司会者、リチャード・ハモンド氏がヨークシャー地域のヘリコプター救急基金に25万ポンド(約6,000万円)を寄付したと報じられている。これは昨年9月、ハモンド氏がテレビ番組撮影のためジェット・エンジン搭載のレースカーで速度記録に挑戦して時速460キロ余で走行中、事故を起こしてヨークシャーの救急ヘリコプターで救護されたためである。

緊急入院した氏は頭部外傷のために2週間にわたって意識がなく、生死の確率は五分五分だったという。しかし奇跡的に5週間で退院し、2006年末からテレビに復帰している。

こうして現在イギリスでは下図のとおり26カ所で救急ヘリコプターが飛んでいる。イギ

リスの国土面積は 242 千平方キロ。したがって配備密度は日本に当てはめるならば、40 カ所に相当する。ドイツの 80 カ所相当、スイスの 120 カ所相当に対して、いささか立ち後れ気味だが、近年かなり普及してきたといえよう。



イギリスのヘリコプター拠点 26 カ所

(ただしスコットランドのグラスゴウとインバネスの
2 カ所は AAAC に加盟していない)

[注] AAAC : Association of Air Ambulance Charities

3 市民の敬愛を受けて飛ぶ

イギリスが欧米の先進諸国にくらべてやや立ち後れ気味とはいえ、ロンドンではきわめて模範的なヘリコプター救急がおこなわれている。始まったのは 1989 年。最初の 1 年間は試行期間ともいうべきもので、ロンドン郊外のビギンヒル飛行場を拠点として 1 年間に 1,000 回ほど出動した。これは関係者の慣熟訓練を兼ねたもので、ロンドン・アンビュランス・サービス (LAS)、警察、消防、民間航空局 (CAA) とヘリコプター・チームとの協力関係を確立するためでもあった。

やがて 1990 年なかば、市内中心部に近いロイヤル・ロンドン・ホスピタルの屋上にヘリ

ポートが完成し、ヘリコプターは日中そこで待機するようになった。担当地域はロンドン市内と周辺を含む半径 50~70 km の範囲。この地域の人口は英国全体の 17.5% に当たる。特にロンドンの周囲を走る環状自動車道路 M25 の範囲内は、どこでも 8 分以内にヘリコプターが飛んでゆける。

運航費は当初「デイリー・エクスプレス」新聞社の寄付金によって A S 365 N 双発タービン・ヘリコプターが飛び、ほぼ 10 年を経た 98 年からはヴァージン・グループのリチャード・ブランソン会長が MD 900 エクスプローラーを寄贈し運航費の一部を負担するようになった。

ヘリコプターの運航に必要な経費は、ロイヤル・ロンドン・ホスピタルによると、対象とする地域の人口 1 人当りにして翌日配達ファースト・クラス郵便切手代のわずか 1 枚分にしか当たらないという。すなわち 27 ペンスで、日本円では $27/100$ ポンド = 223 円 × 0.27 で、およそ 60 円に相当する。ちなみに日本ならば、全国 50 ヶ所に拠点を置くとして、1 ヶ所 2 億円ならば総額 100 億円。これを人口で割ると 80 円になり、やはり普通郵便の切手代に一致する。

ロンドンのヘリコプター救急は、それでも放っておけば年間およそ 50 万ポンド（約 1.1 億円余）が不足するとして、一般の寄付を募ると同時に、音楽を聴きながらダンスもできるディナーショーを催したり、ファッション・ショーを開いたり、市民ホールを借りてフリーマーケットを行なうなど、資金集めの努力がつついている。

ヘリコプターには医師とパラメディックのほか、パイロット 2 人が乗り組む。常に医師が乗るのはイギリスではロンドンだけであり、パイロット 2 人というのも他に例がない。これは拠点病院が市街地の中にあることと、大都市の混雑した道路や広場に着陸することが多いためである。トラファルガー広場でもピカデリーサーカスでもウェストミンスター寺院や大英博物館の前庭でも、主ローターの 2 倍の広さがあれば、ヘリコプターはどこにでも着陸する。無論そのためには、現場の交通を規制し、群衆を整理する警察官の協力がなければならないが、着陸進入に際してはパイロットと地上の警察官が直接無線交信をするなど、きわめて密接な連携によって安全が保たれている。最近までの 16 年間に 16,000 件を超える出動をしながら、事故は一度も起こしていない。

こうして高い建物の建ち並ぶ市街地で困難な飛行をつづけ、年間 1,000 人余の救護に当たるヘリコプターがロンドン市民の敬愛を受けぬはずはない。ヒースロウ空港に患者を迎えにゆくときは、女王陛下の専用機ですら上空で待機するほどである。

